



今年の冬は、つばあんのまわりには、はしがれがほどこされ、あつさりした口あたりが好評です。福多屋菓子舗

海ガスタ(41)
1811
0765(62)1144



ださいますよ。きくら美容室

0764
(23)1850

●私の意見

赤羽徳雄(朝日新聞 富山支局長)

都市を映す水 美しい松川



このまちに、十月、大阪からやってきた。雪の季節が迫っていたため、仕事場まで歩いていけるところにと、都心にマンシヨンを探して、小さな川「松川」に出合った。

のぞいて見るとコイが泳いでいる。清流にしかいないはずのオイカワやウグイの姿も。兩岸は美しい桜並木。点々とプロンズの彫刻も。地方都市とはいえず、人口三十万人を超す都市のど真ん中に、こんなにきれいな川が流れているのに驚いた。

この川はほとりを通って、毎日、支局まで通勤している。四季を映して、桜の葉が紅葉し、そして散っていく様は、とても感動的だった。この光景に見覚えがあったのだが、しばらくして、その理由に気づいた。宮本輝原作の映画「蜩川」の舞台だったのだ。

この川に遊覧船を浮かべる計画を聞いて、これはおもしろいと思った。都市の川は、どこも、いま、死に瀕している。大阪も、

東京も。黒く濁り、ドブ臭におわれている。ところが、富山では、まだ清流が保たれ、しかも観光資源に活用されようとしているわけだ。

都市は水の恵みを受けて川のほとりに生まれ、そして、肥大するともにその汚物で母なる川を滅ぼしてきた。川は都市を映す鏡であり、そこに住む人々の心をも映す鏡でもあった。富山は、他の都市とは違い、川をまだ生かしている。

支局員の取材を通じて、松川のことをいろいろ知った。一時はここもドブ川と変わらなくなり、住民による浄化運動が起きたこと。行政がこれにこたえて神通川の支流から導水して汚れを薄めたこと。市役所や民間団体がコイを放流し育ててきたこと。川の両岸が公園として整備してきたこと。この美しさは多くの人々の手で守られていたのだ。

松川の話、何度か朝日新聞の全国版や地方版の記事にして送った。この取材の中で、もう

ひとつの驚きにぶつかった。いま、都市問題では、水辺環境保全が大きなテーマになっており、松川のケースは全国でも先駆的なモデルになるのではない、と、全国水都連合事務局(大阪)などに照会した。だが、各地の都市を調べている学者、研究者たちは松川について何も知らなかった。これまで県内マスコミで取り上げられることはあっても、全国へ向けての情報発信がまったくなされていなかったのだ。

私たちは、この守られた「水辺環境」を、今後も取り上げていきたいと思う。

遊覧船の試乗会が十月に行われた時、私も有料客の一人として船に乗った。岸を歩くのもいいのだが、船から見る光景はまたすばらしかった。橋の上には市民がたずんで船を見下ろしており、いい気分になった。ただ、水面に顔を近づけると、わずかににおうドブ臭が気になった。

いま、観光客向けにイベントなどが企画されているようだ。それもアイデアだが、市民が、桜の花見シーズンだけでなく、四季を通じて水辺に親しむことをもっと考える必要があると思う。市民が集まれば、それにふさわしく周辺が整備され、そこには観光客が自然に集まってくる。市民が川に背を向けたまちは、次々と川が汚れ死んでいったことを教訓にしてほしい。